

Chairman's Correspondence

リリーベールは何故『芸術科目』を大切にするのでしょうか

最近 21 世紀を生きるスキルのひとつに「**芸術**」の**必要性**があげられています。

リーダーを育てる中高一貫校を米国などではボーディングスクールと言い、英国では、パブリックスクールと言います(公立ではなく私立で、王侯貴族の子ばかりでなく一般の人にも開かれた学校という意味です。英国の公立学校はステイツスクールと言います)。そこで学生は必ずアート(芸術)の科目、絵画・彫塑・写真や映画・演劇、音楽では声楽や器楽からひとつ選ぶことになっています。

日本では「勉強」だけやってきたエリートは多いのですが、人間的素養で世界に通用する人材はなかなか育ちません。

経験的に教育界では芸術(演劇も含む)を学ぶと、リーダーになったときに様々な認識能力が高まると言われてきました。またノーベル賞受賞者の大半が芸術の趣味をもっていると結果が出ています。

「アート」は人間に美意識や美学を育み、ヴィジュアルにこれから向かう場所(つまりヴィジョン=VISION)を視覚的にイメージさせてくれると言うのです。芸術を学ぶと感性が豊かになり、感受性豊かな人は課題発見能力が高く創造的なのです。

20 世紀を代表するリーダーのチャーチル(例は極めて悪いのですがヒトラーも?)は本格的な絵描きでした。チャーチルは文学も得意(多分ノーベル賞を取っています)でしたし、ヴィジョンを解りやすく描き、それを耳にした人を熱狂させました。

リリーベール小学校では「アート」は大学院で美術を専攻した江口奈津季先生や、美大卒の綿引真宏先生。音楽は演奏家でもある堀江貴和子先生や海外留学を含むキャリアの兼氏ちな美先生に、力を入れてご指導いただいています。さらに書写は書道家の橘芳玉先生が、演劇では全国でも珍しい演劇専門の後藤れい先生と、劇団を主宰しておられる大滝順二先生に長年ご指導いただいています。ダンスの先生の福地正義先生や米倉麻理子先生もおられます。最後に忘れてはいけません！リリーベールでは理科や体育、英語に情報も専科の先生です。

芸術はおまけの科目ではありません。

リリーベールの誇る人生を豊かにしてくれる重要科目です。



Chairman's Correspondence

自分探し



よく世界中をバックパッカーとして旅し、自分探しをしている人がいます。

また、日本でもアルバイトを重ねて、自由な生き方？をしながら、自分探しをする人がいます。若者ならわかるような気がします。今では40代までやっている人もいます。

「自分探し」って何でしょう？

中には、現実逃避や、社会に対する甘えや恐れ、単に刺激を求め続ける人などがいるのでそれは別として、

ある心理学者は「要するに自分の好きなことや得意なことで仕事に結び付けられるものを探すこと」と言っています。

私は、好きなことは必ずしも得意なことではないと思います。

例えばギターが好きでもプロにはなれないと思いますが、少なくとも得意なことは、他人より優れているので認められることが多く、結果好きになり、優位なので、仕事に結び付けられれば幸せに近づくと思います。

仕事に結びつけず趣味に生きることも良いと思います。しかし当たり前ですが人は仕事をしなければ食べていけません。家族をもてばさらに重責がかかります。

女性も働くのは当たり前の社会ですから、男女を問わず仕事に就くようになり、しかも職業人生は40～50年続き、人生の大部分の時間を過ごすことになるので、仕事が「単にお金を稼ぐだけ」ではなく「この仕事が好きだ」「大変だけどやりがいがある」とか「社会の役に立っている充実感がある」といったことが幸せに近くなるのは確かです。

それを探すのが自分探しなのです。

その道はいろいろありますが、少なくとも、小学校の時期は人との「コミュニケーションが上手になること」「得意なことを見つけていくこと」が必要だと思います。それが20歳ぐらいまでの教育の目的です。

小学生のうちは様々な経験体験をまんべんなく行い、中高生になったら少しずつ、適正を職業と結び付けられるための準備をしていくべきでしょう。

